

子どもはどうやって 友達と一緒に遊び、 表現をするように なるのか？

―幼稚園での4歳児の6ヶ月間の事例から―

Sakiko Sagawa

佐川 早季子

奈良教育大学 学校教育講座

子どもはどうやって友達と一緒に遊び、 表現をするようになるのか？

－幼稚園での4歳児の6ヶ月間の事例から－

奈良教育大学 学校教育講座 佐川 早季子

1. はじめに

幼稚園や保育所、こども園は、子どもが初めて同じくらいの年齢の子どもたちと出会う場です。子どもがお母さんやお父さんと一緒に過ごしていた家庭から一歩踏み出し、このような保育の場に入っていくことは、自分とはちがう多様な他者のあいだで生きるという意味で、社会への最初の一歩と言ってもいいでしょう。

様々な子どもたちがいる場で、子どもは最初から良好な関係を築き、友達をつくっているのでしょうか。幼稚園や保育所で観察を続けていると、そんな子どもはまれで、友達とかかわるなかで気持ちをぶつけ合い、泣いたり怒ったりしながら、少しずつ自分のことも他人のこともわかっていくというのが実際のようなようです。空き箱などの様々な素材や道具を使って子どもが好きなものをつくる製作コーナーでは、子どもたちがぶつかったり、すれ違ったりするなかで、だんだん、他の子どもから刺激を受けて、自分の表現に反映するといった姿が見られてきます。



図1 4歳児ななこちゃんのつくったもの

そんな子どもたちの姿は、大人になった私たちの目には、不器用で未熟なものに映るかもしれません。でも、子どもたちのかかわりがどのように変わっていくのかを、じっくりと丁寧に見てみると、人と人が協働で何かを創りだそうとする事の原点が見えてくるように思います。

ここでは、幼稚園の4歳の男の子きいちくんが、製作コーナーで、一人でものをつくっている事例から、友達と言葉を交わして刺激を受けながら自己表現を行う事例が見られるまでの6ヶ月間の記録を通して、子どもがどのように友達から刺激を受けて表現をするようになるのかについて考えてみたいと思います¹⁾。なお、ここで出てくる名前は、すべて仮名です。

2. 並行遊びの状態

幼稚園で観察を始めた当初、きいちくんは、よく一人で製作コーナーでものをつくっていました。仮面ライダーのグッズをつくっては、近くにいる私によく見せに来てくれました。図2は、そんな6月のある日の事例です。

きいちくんは、みきちゃんと向き合うところに立って、いつものように仮面ライダーのグッズをつくっていました。この図では、ビデオ記録をもとに、子どもが他の子どものつくっているものをじっと見たときは太い矢印(⇒)を、自分がつくったものを他の人に見せたときは細い点線の矢印(⋯⇒)を、何をつくっているかを言葉で伝えたときは細い実線の矢印(→)を記しています。②の矢印の向きからわかるように、きいちくんは、ものをつくり終わったあと、つくったものを観察者である私に見せに来て、「これ、仮面ライダーの」と伝えています。このときのきいちくんにとっては、近くに子どもがいても、つくったものを見せたい相手は大人なのです。

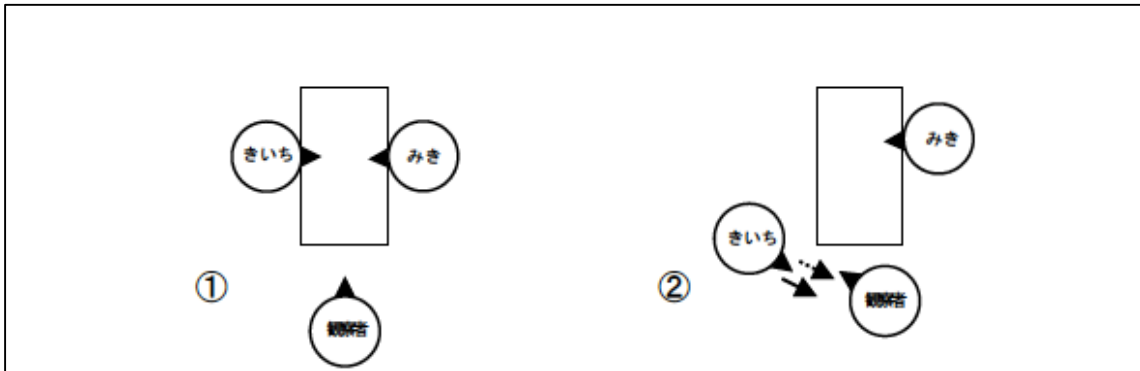


図2 6月のきいちくんの事例1 <それぞれのものづくり>

3. 隣に移動すること

子ども同士のかかわりがほとんど見られなかった先ほどの事例1の3ヶ月後、2学期になりました。

図3は、9月のきいちくんの事例です。きいちくんとよういちくんは、一緒にものをつくっているわけではありませんでしたが、よういちくんの前にしかセロハンテープカッターがなかったために、きいちくんは、よういちくんの隣に移動してきます。すると、視野が重なったためか、きいちくんとよういちくんは、お互いがつくっているものに視線を向けて、じっと見えています。隣に居るといことは、視野を重ねて、同じものに注意を向けるきっかけになると言えそうです。

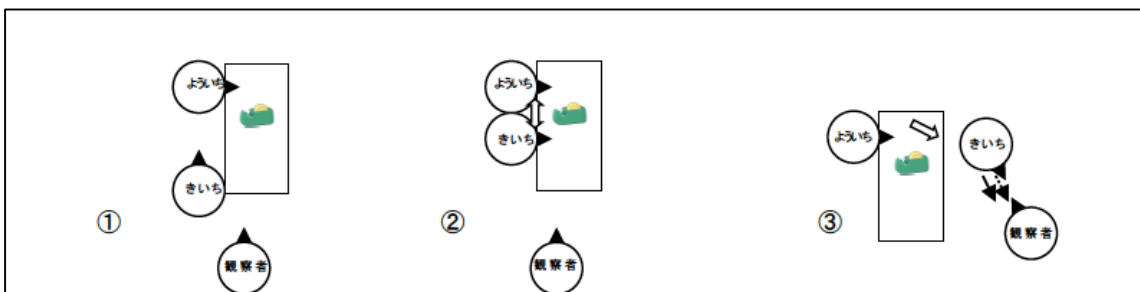


図3 9月のきいちくんの事例2 <隣に移動>

4. 何をつくっているかを言葉で伝えること

10月になりました。この幼稚園では、10月初めに運動会があります。運動会は、ただ子ども同士が競い合うだけでなく、クラスみんなで何かをすることで、仲間意識やクラスの一員だという意識が盛り上がる行事でもあります。そんなとき、仲間と一緒に遊びたいというきいちくんの思いが表れたような事例3が見られました。

図4は、10月のきいちくんの事例です。きいちくんは、最初はおさむくんやかいじくんと遊んでいたわけではありませんでした。でもおさむくんとかいじくんが隣に近寄って、おしゃべりをしているのを見たいきいちくんは、二人の仲に入りたと思ったのでしょう。おさむくんとかいじくんの間にぐっと体を入れて、真ん中に入りました。すると、やはり視野が重なったためか、相手のつくったものが視野に入り、三人は、互いのつくったものを見合います。そして、きいちくんが「おれ、魔法使いつくってるんだ」とかいじくんに言葉で伝えていきます。言葉で伝え合う前に、体を寄せて、視野を重ねて、相手は「何をしようとしているのかな」と意図を理解しようとし、自分がつくっているものを伝えるのです。

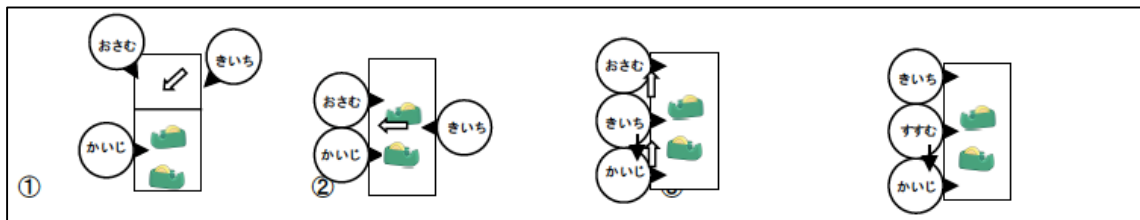


図4 10月のきいちくんの事例3 <つくったものを見せる>

5. 友達から受けた刺激を自分の表現につなげる

11月は、運動会をきっかけに盛り上がった仲間への関心が、どんどん深まってきます。友達と遊んだ経験も増えてきて、どの友達とどんな遊びができるか、どうやって遊んだらいいかがわかってきます。

図5では、きいちくんは、「仮面ライダーごっこをする」というゴールを、製作コーナーにいる友達と伝え合ってから、その仮面ライダーごっこ

の道具をつくろうとしています。同じ道具をつくろうとしているいくやくんの手元を見ては、「あとは色を塗るだけだよ、いくや」と教えたりしています。そして、じろうくんがトイレットペーパーの芯2本を縦につなげているのを見て(図5)、^①、「いいな」と思ったのか、そのときやろうとしていたことをやめて、紙コップを手に取り、じろうくんと同じように、2つの紙コップを縦に重ねて、仮面ライダーの道具をつくりはじめます。同じゴールを目指すなかで、きいちくんは、じろうくんの手元を見て、そのアイデアの面白さに気づいたのでしょう。

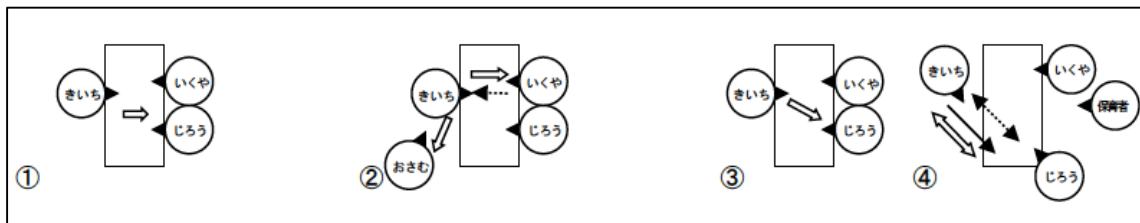


図5 11月のきいちくんの事例4 <友達づくり方をとりいれる>

このように、子どもは、体を寄せ合い、モノを見たり・見せたりするなかで、気持ちを通わせ、言葉でもコミュニケーションを図るようになってきます。特に、幼児期の子どもにとっては、体を寄せて共振すること、まなざしを交わすことが、大切なコミュニケーションです。そのようななかかわりがあるからこそ、言葉で意図や意見を交わすようになり、相手の考えをとりいれ、自分の表現に活かすという創造的な行為を行うと言えます。

[注]

1) 初出は、以下の論文です。

佐川早季子 (2014) 幼児の造形表現におけるモチーフの共有過程の検討-身体配置・視線に着目して、保育学研究、52(1)、43-55.

佐川 早季子 (Sakiko Sagawa)

2012年 東京大学大学院 教育学研究科 修士課程修了

2015年 奈良教育大学 特任准教授



【研究テーマ】

—子どもの協働での造形表現

子どもは、誰かと一緒に遊びたいとき、そっとその人のそばに寄ったり、「一緒にやろうよ」と誘うために自分がつくったモノを見せたりと、体と言葉で語っています。

このような様々な「言葉」を交わしながら、友達から刺激を受けて表現する子どもの姿を、保育現場に観察に行き、事例を集めて研究しています。

【著者の自己紹介】

—趣味

梅干しやお味噌など発酵食品をつくること。おいしいものを食べたり、飲んだりすること。マンガを読むこと。

—座右の銘 七転び八起き・案ずるより産むがやすし

—今の研究分野を選択したきっかけ 自分の子どもが生まれ、子育てを始めたことがきっかけで、ずっと子どもにかかわる仕事や研究がしたいと思いました。

子どもはどうやって友達と一緒に遊び、表現をするようになるのか？

—幼稚園での4歳児の6ヶ月間の事例から—

著者 さがわ さきこ 佐川 早季子

2016年2月29日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>